

令和 2年 11月

# 教育相談スタッフによる「学校訪問」の報告

— コロナ禍における子ども・学校の現状と課題について —



- 稚内市教育相談スタッフ会議
- 発行 稚内市教育委員会

## 1. 教育相談スタッフによる学校訪問について

コロナ禍の中での学校生活、社会生活は子どもたちの心と身体に大きな影響をおよぼしていると考えられます。このような状況が長期化することで、疲労が積み重なり、憂鬱な気持ちや焦り、イライラなど子どもたちの中にストレスをため込むことになっているのではないのでしょうか。

私たち稚内市教育相談スタッフは、6月から学校再開後の子どもたちの心のケアについて課題にしてきました。この度、各学校の協力を得て、夏休み明けの2週間、市内の小中学校9校を訪問し、子どもたち、教職員、そして学校としての苦労や課題など、話を伺うことができました。この報告書は、学校訪問を通じてわかってきたこと、各校の努力や工夫など学ぶべきこと、そしてこれから検討しなければならないことなどを整理しました。大変不十分ではなりましたが、学校における「子どもの心のケア」「困っている子の支援」を組み立てるための参考になればと願っています。

## 2. 学校訪問活動の状況

	8月18日(火)	8月19日(水)	8月19日(水)
学 校	中央小 ○今野校長 ○飯田教頭	東 小 ○坂本校長 ○小棚木教頭	南 小 ○杉本校長 ○宮崎教頭 ○山本指導部長
教育相談 スタッフ	○山川(学校教育課長) ○本間(教育相談所)	○橋本(社会教育課主査) ○吉田(つばさ学級)	○細川(こども課長) ○植木(教育相談所)

	8月20日(木)	8月21日(金)	8月24日(月)
学 校	潮見小 ○大島校長 ○嶋崎教頭	港 小 ○中村教頭	南 中 ○和田校長 ○澤教頭
教育相談 スタッフ	○佐伯(教育部長) ○久慈(稚高定時教頭) ○平間(教育相談所)	○五十嵐(学校教育課) ○但田(稚内北星学園大) ○本間(教育相談所)	○但田(稚内北星学園大) ○本間(教育相談所) ○山本(つばさ学級)

	8月24日(月)	8月27日(木)	8月19日(水)
学 校	稚内中 ○小林校長 ○松本教頭	東 中 ○本間校長 ○河野教頭 ○大西指導部長	潮見中 ○塩崎校長
教育相談 スタッフ	○植木(教育相談所) ○藤間(つばさ学級)	○細川(こども課長) ○中野(民児協事務局長) ○吉田(つばさ学級)	○佐伯(教育部長) ○中野(民児協事務局長) ○植木(教育相談所)

### 3. 学校訪問での話し合いの記録（課題別に小学校・中学校に分けてまとめました）

#### 学校再開後(2 学期あけ)の子どもたちの様子について

##### 【 小学校 】

- みんな元気に学校に通っている。今までと変わらないように見える。
- 淡々と学校生活を送っているように見えたが、生活リズムの乱れが原因で、登校しぶりが何人かいた。
- 全体として、授業は落ちついてできている。高学年の一部の子どもから「学習の遅れが心配だ」という声があった。
- 大きな行事もなく、授業が淡々と進んでいるように感じるが、子どもたちがそれで大丈夫かと心配は常に持っている。
- マスクは忘れずに持ってきている。マスクを外すことはなく遊んでいる。
- 長い間、親子が一緒にいるために、親子の仲が悪くなったという事例も聞いている。
- 当初、登校しぶりの子が見られたが重たい状況ではなかった。
- 高学年の一部の子が落ち着かない状況があり、保健室でクールダウンするなど対応した。
- 全校で一同に会する機会がないため、他の学年の子どもとの交流ができない。
- コロナ禍の中で、心配な子ども・家庭に対して、学校としてつながることに力を入れている。特別支援学級在籍の子どもたちは、ていねいに支援ができているが、通常学級にいる発達障害の子どもたちの状況が心配だ。
- 保護者との個別懇談から、子どもたちの中でR15 指定のオンラインゲームが流行ったり、ゲームの時間や影響が心配。
- 生活アンケートに取り組んだり、子どもたちの様子を観察したり、これまでより子どもの実態をていねいに把握しようとしている。

##### 【 中学校 】

- 中体連や運動会がない分、勉強に向かう生徒が増えている。子ども同士のふれあう遊びができないので、子どもたちの不満はあるが大きく表面化していない。
- 全体として、子どもたちに大きな影響は出ていないが、一部、休校中に生活リズムを崩した生徒がいた。
- 1年生にとっては、4・5月を先輩と学校生活を過ごすことができなかったことは大きな課題であると感じている。学年別に集まり行事などを行っているが、1年生の成長にとってはマイナスであると感じている。
- 教科の学習活動が日常のほとんどを占めているので、息苦しさを感じている子どもが多い。教科の授業進度が早いと感じている生徒が多い。
- コロナ禍の中で、いつもと違うリズムで学校が始まり、活動が制限され子どもたちの関係性が未成熟であり、その影響が出てきている。
- 不登校をはじめ、体調不良等による10人程度の欠席が続いている。保健室利用が多くなっ

てきて、遅刻・早退する生徒、教室に入れない生徒などがいて心配だ。

- 行事がないこと、部活動の総仕上げの場がなかったことで、3年生への影響を心配していたが、意外と冷静に受け止め、次の目標に向かって進んでいる。
- 修学旅行については、行政の支援がありがたい。
- 生活リズムを崩した原因はゲーム。「フォートナイト」というゲームにはまり、夜中の2時、3時に開催されるオンラインイベントに参加して寝不足になり、学校を休んだり、遅刻したりしている。課金トラブルも生まれている。

## 教職員の様子について

### 【 小学校 】

- S S Wの協力も得ながら、子どもの気持ち、保護者の気持ちを聞き取り、学校としての情報共有を行っている。
- 家庭訪問がなく保護者との顔合わせが遅れたため、連携の面で不安であることや、1学期に運動会を節目にした「集団づくり、仲間づくり」の取組ができないことなど、特に1・3・5年の学年で難しさを感じている。
- 休校から学校が再開するまでの4月から6月に、学級担任は各家庭に3・4回は電話連絡をしていた。
- 子どもと一緒に遊んだり、子どもの話を聞いたりするなど、関りを大切にしている。
- 成績評価を2学期にしたりして負荷を少なくしているが、教師のストレスについては、毎日の消毒作業やトイレ清掃、複式学級のプリントづくりなど大変さはある。

### 【 中学校 】

- 日常業務の中での連携不足が生まれぬよう配慮しているが、交流・懇親の場が少ないので、教職員個々の生活状況や悩み相談、きめ細かい配慮ができているかどうか心配だ。
- 「働き方改革」にともない、「どこまでやるのか」という内容、質が問われている。
- 平日にやり残した仕事を土日にやらなければならない実態もある。
- 管理的な生徒指導になっているところもあり、子どもたちに寄り添える教師になれるよう発信している。
- 授業は一斉指導しかできない。子ども同士を関わらせる活動ができないことが問題と考えている。教科の授業は早く進んでいる。
- 職場体験などの総合的な学習が実施できないので、その代替りの教育活動について苦慮している。
- コロナによって、先生方は大変な中でも、非常に前向きにいろいろなアイデア（ズームの朝の会等）を出し、工夫しながらがんばってくれている。
- 先生の多くは、文科省や道教委のホームページなどを日々チェックするなど、先回りして、コロナ等の対応について勉強しているので心強い。

## 学校としての努力や創意工夫について

### 【 小学校 】

- 心配な子どもたちについて、SSWの力を借りながら、担任、養護教諭、管理職が連携しあって、本人や保護者とつながれるよう取り組んできている。
- SSWの協力を得ながら、学校として保護者対応をすすめている。個別に支援が必要な子どもについては、継続的に見守っている。
- 子どもたちの健康管理をがんばっているせいか、2学期明けの子どもたちの病欠が少ない。
- 子どもたちの健康、学習、人間関係などの課題に対して、校長を中心に分掌で課題を整理して、対策をしっかりと立てることで大きな混乱を生んでない。
- 子どもの生活アンケートに取り組み、その実態を把握して教職員で共有している。
- 子ども一人ひとりと関わること、遊んだり話を聞いたりすることを大切にしている。

### 【 中学校 】

- コロナ禍の中での生徒への影響について、学校としてアンケートを実施していきたい。
- 学校として大事にしている「合唱祭」を文化センターのステージを大きく広げ、コロナ対策をしたうえで実施する。
- コロナ前と比べ、学校ホームページへのアクセス数が2倍以上になった。休業中は、宿題についてはホームページ上で提供した。利用できない家庭には直接プリントを配布した。

## 今後の課題について

### 【 小学校 】

- コロナ禍の影響でPTA活動ができないことが課題。2学期のPTA活動も当分自粛することになっている。小学校が初めての保護者にとっては、教職員や保護者どうしのつながりができにくいことを心配している。
- 心配な子どもや保護者への支援をどうすすめていくのか、サポート体制が必要なケースがあり、関係者とも連携して進めていかななくてはならない。
- 学校としていろいろ支援してほしいことがあるので宜しく願いたい。

### 【 中学校 】

- 生徒へのきめ細やかな支援が必要だが、空き時間のある教師がいなく対応が苦しい状況。
- 未だ、全員の保護者と顔を合わせることができていない。保護者は「親ができることは協力したい」という思いを持ってきているが、学校として受け止めきれない実態がある。
- 教育委員会スタッフの方のがんばりに元気をもらっている。
- 教育局からの調査物や提案など、学校の立場になって精査ができないか。
- 分散登校の1クラス20人程度の授業では、子どもたちの集中力が高まり、生徒一人ひとりに寄り添った授業ができた。コロナ前に戻すのではなく、より良いものを求めること。

#### 4. 「学校訪問」を終えて、今後の課題について(教育相談スタッフの意見交換から)

学校訪問を終え、各校での話し合いの記録を整理した上で、9月10日の教育相談スタッフ会議において学校訪問に関する交流と意見交換を実施しました。その要点について、以下のように整理しました。

- (1) 学校訪問を実施して、あらためて学校現場の声を直接聞くことが大切である。
- (2) この間の学校現場の努力が子どもたちを支えている。現場の努力だけに頼るのではなく、例えば、分散登校時の教育環境の良さやリモート環境の重要性、ICTの活用などの活用を検討していくことが重要である。また、コロナ禍の前に戻すという発想ではなく、コロナの時代に見直すべきことは何かを考えるチャンスにしていく。
- (3) 現状は、学校現場にとってマンパワーが不足している。子どもの支援等、マンパワー不足による苦勞が表れている。その中でもがんばっているのが学校現場である。  
学校の中で子どもを直接指導・支援する教職員と教職員を支えるサポートスタッフの充実が求められる。さらに、学校を外部から支えるマンパワーも必要で、例えば、地域コーディネーターやキャリア教育コーディネーターなどの検討をしていかななくてはならない。
- (4) 子どもたちの中でゲームづけになっているケースが話題になっていた。困っている子どもや保護者・家庭がこれ以上困らないように、支援すること。子どもの心に寄り添い、心のケアを大切にすることが必要である。



学校訪問の様子（南中学校・校長室にて）